

寄

稿

戦後の校章のデザイン考案者と 応援歌「戦わん哉」の作詞者は

同窓生だった

応援歌「日本海」の作詞者も同窓生といわれる

三十期(新制十二期)

同窓会副会長 工藤茂宣

はじめに

我が母校秋田県立能代高等学校も、前身の旧制秋田県立能代中学校創立から数えて八十周年記念を迎えた。誠におめでたく誇りに思う。

創立八十周年記念に当たり、この稿ではこれまで長い間不明とされてきた、戦後の校章のデザイン考案者と応援歌の作詞者などが同窓生だったことが判明したことを記す。八十周年記念誌に記録としてぜひ残しておくべき

であると考えベンを執った。

以下の経緯を読めば解るように、十年後の九十周年記念では、今よりさらに「星霜移り人は去り」(旧制第一高等学校寮歌「嗚呼玉杯に」より)となり、解明はほとんど困難となるであろう。

現在に最も近い戦後の校章の件でさえ五十七年前のこと、応援歌「戦わん哉」は六十七年前のことである。あまり簡潔に記すと説得力に欠ける。「同窓生の証人や考証が必要であると考え、小生が入手し得た資料や情報のほとんどを記した。文章がくどく長文になったことはやむを得なかったこととご理解いただきたい。なお、敬称であるが、同窓生だからと敬称を付けずに書いてみたが、どうもしっくりした文章にならなかった。そこで、すべて氏と敬称をつけさせていただいた。

一、戦後の校章のデザイン考案者は故菊地哲雄氏(昭和二十四年卒、十九期、新制一期)と判明す

戦後の校章(徽章)のデザイン考案者が、昭和二十四年三月卒、十九期、新制一期の故菊地哲雄氏であることが判明したいきさつを説明する。以下、卒業年度の昭和はSとする。平成十四年十月一日(火)午後六時から、同窓会秋田支部総会(会長加賀勝己氏(S三十五年卒、三十期))が秋田市の彌高会館にて開催された。

本部からは、山崎正規教頭(S三十八年卒、三十三期)、同窓会事務局松谷健氏(S四十年卒、三十五期)、サッカー部監督浅野宗和氏(H四四年卒、六十二期)、田中仁純同窓会長(S三十年卒、二十五期)の代理として小生が出席した。

その会で、長内亮氏(S二十八年卒、二十三期)が「六十周年記念誌では『現在の校章のデザインの考案者は不明である』と記されているが、兄から相場正美さん(S二十五年卒、二十期、新制二期、六年間在学)であると聞いた。どうなのか」との正式な質問があった。そこで小生は「本部に帰って調べてみます」と回答した。亮氏のご令兄は長内剛氏(S二十七年卒、二十二期)である。

その懇親会の席で、松谷健氏は安井貞三氏

(S二十四年卒、十九期、新制一期、六年間在学)から「私たちの同期生のデザインが採用されたはずである。同期の小西重夫君か熊谷健君(S二十三年卒、十九期、旧制中学五年で卒業)に聞けば判るはずだ」と言われた。

小生も能代に帰ってさっそく、昭和六十年十月三日発行の創立六十周年記念誌を調べた。亮氏のおっしゃったように、三十八頁に当時社会科教諭であった鈴木進氏によって「昭和八年、全国中等学校徽章コンクールで三位に輝いた校章は能中魂の『文武両道』を象徴するペンと剣をデザイン化したものであったが、民主主義国家であるのに、武の象徴である剣は好ましくないということで校章の改定にあたった。つまり、九月の落成式にまにあうようにと全職員、全生徒から校章のデザインを募集し、それを校内に展示して、人気投票によって決定しようとしたのである。しかし、その結果、だれのデザインが選ばれたかは残念ながらはつきりしていない」と記されていた。

平成七年の創立七十周年記念誌の年表には「昭和二十三年九月二十三日、新校舎落成、新校歌・新校章発表」と記載されている。鈴木氏の文と七十周年記念誌の年表からすると、新校歌も新校章も昭和二十二年の初めの頃から二十三年の九月にかけてのことである。

そこで、平成十四年十一月二十五日(月)

の平安閣での第三回同窓会役員会にて、小生が長内亮氏の秋田市での質問を報告した。その席で事務局の松谷健氏が調べることになったが、副会長の柴田郁氏(S二十九年卒、二十四期)が相場正美氏を知っており、問い合わせることとした。柴田氏は翌二十六日に相場氏に電話をし、会話内容を松谷氏に報告した。結果は「否」であった。二位・次点だったとのこと。相場氏のおっしゃるには「自分のデザインは生徒の気は抜群だったが、職員会議でどんでん返しをされたくやしさを忘れない」とのことだった。ついで相場氏は十八期生の名前を四人ほど挙げて下さったが、松谷氏が電話しても連絡が取れなかった。そこで松谷氏は、十八期の幹事である大山正晴氏(S二十二年卒、十八期)に問い合わせたところ、「われわれは、S二十二年卒だから、新しい校章については関与していない」と。じつは、相場氏が十八期生を紹介して下さったのは、柴田氏によれば相場氏の記憶違いであった。

それではと、松谷氏は秋田支部の安井貞三氏の話の小西重夫氏に問い合わせたところ、「校章のデザインの発案者は菊地哲雄君(S二十四年卒、十九期、新制一期、六年間在学)である。自分も相談を受けたことがある」とのことだった。松谷氏は熊谷健氏にも確認したところ、小西氏の言う通りであった。ここ

まで解ったのは平成十四年十二月下旬であった。小生もその頃、医師会の会合の際に小西氏に聞いたところ「菊地君だ」と言われた。ここで、判りやすくするために以下の四氏の卒業(修了)年や期を整理する。

小西重夫、熊谷健、安井貞三、菊地哲雄の四氏は旧制能代中学への入学は昭和十八年四月で、もともとは同期生である。小西氏は、同窓会名簿上では昭和二十三年卒、十九期、旧制中学五年で卒業となっている。しかし、氏は一年早く能中四年修了で昭和二十二年に新設の旧制秋田県立秋田高等学校に進学している。熊谷氏は最も判りやすく能中五年で十九期生として昭和二十三年三月に卒業。安井氏と菊地氏は能中五年卒業後新制能代高校に進み一年在学し、計六年間在学して同じく十九期(新制一期)として昭和二十四年三月に卒業している。十九期生は二つ存在する。この事情が解らないと混乱するのみである。以前から、なぜ小西氏の言葉に昭和二十二年新設の旧制秋田高等学校の校章の話が出てくるのか解せないでいた小生は、平成十六年十二月に氏に電話で尋ね、氏は四修であることとで氷解した。

平成十六年十一月十七日付きの小西重夫氏の小生へのお手紙によれば詳細は以下のごとくである。

「自分は、能中から昭和二十二年に新設さ

れた旧制秋田県立秋田高等学校に進学した。昭和二十三年になって、旧制能代中学五年生から新制の能代高校に進んだ菊地君が「能代中学も新制高校になるので新しい校章に替えることになったので応募する」と。昭和二十三年の春休みだったかもっと後だったか忘れたが、二人でいろいろ工夫した末、剣の部分に松に置き換えたほうが落ち着きが良いという事になった。私が着けている旧制秋田高等学校の杉の木にヒントを得たものであるが、同じく能代の黒松を取り入れたデザインであった。相場先生の作品のことは知らなかったが、あとで菊地君の作品が採用されたことを知った次第です」と。

小西重夫氏のスケッチと旧制能中、新制能

小西氏のスケッチと氏の説明

〔旧制秋田高〕

〔能代高〕

(杉の木 秋田杉)



矢留城の矢羽

(松の木とペン)



剣から松へ



(旧制中学時代の校章)

ペンと剣で文武両道を示す。このシャープなデザインは、昭和8年度全国中等学校徽章コンクールで3位に入賞。中央部分で唐草模様風からみ合う「中」と「N」の文字が「能中」を表すが、昭和18年「N」が敵性文字であるということで削除される。「N」は21年に復活するが、三角の「剣」がわざわざ消す運命に遭う。昭和の歴史そのものを象徴するようなマークである。



(現在の校章)

中央に「N」を台として、「高」の文字を置き、松の葉で風土性を表わし、ペンのデザインで学舎の学芸的性格を示す。学制改革で中から高校に移行する際に、昭和23年9月23日に制定される。新しい校章を決めるに際して全校の職員生徒から選定されたものを募集し、デザインしたものが、昭和24年卒、19期と、平成14年末に判明した。

代高の校章は図のごとくである。なお、ここで説明しておくが、昭和二十年三月卒業の十六期・十七期から昭和二十七年三月卒業の二十二期(新制四期)までは、終戦前後の事情により大変複雑で解りにくい。関心のある方は同窓会名簿をご覧あれ。また、昭和二十三年四月一日に新制の秋田県立能代南高等学校が発足し、昭和二十八年四月一日に秋田県立能代高等学校と改称しているが、複雑さを避けるため、文中ではあえて新制能代高校と記した事をお許しいただきたい。

以上、詳細説明が前後するところもあるが、平成十五年九月十九日(金)の金勇での平成

十五年度同窓会総会において、現在の校章のデザインは、昭和二十四年卒、十九期、新制一期の故菊地哲雄氏であることが承認された。

なお、まこ

とに残念ながら菊地哲雄氏は松谷氏の調査によると平成九年三月に故人となっており、相場正美氏も平成十六年二月に故人となられた。さらに長内剛氏は、平成七年の名簿では現役会員として掲載されているが、平成十六年十一月発行の八十周年記念の名簿では故人になっている。三先輩のご冥福を祈り、この稿をもってご三人に心からの追悼の意を表させていただきます。

一、応援歌「戦わん哉」の作詞者は、「久喜健男ほか十期生有志(昭和十四年卒)」と決定す

いきさつ。

小生は「能代寮歌を愛する会」の幹事をやっているほか、全国各地の寮歌祭に参加して旧制高等学校の数多くの寮歌に親しんできた。その中で、わが校の応援歌の大部分が旧制高校の寮歌からメロディーを拝借していることに気づいた。旧制中学では全国どこの中学でも旧制高校の寮歌のメロディーを拝借するのは普通だったという。昨今の世の中のように著作権もなにかあったおらかな時代であった。むしろ、拝借された方が喜んでいただ。これらを、毎年一回十二月発行の能代高等学校同窓会会報・松陵に三回にわたって寄稿した。すなわち、平成十年十二月・第十

号の「わが校の応援歌の出自について」、平成十一年十二月・第十一号の「わが校の応援歌の出自」に対してのご教示、平成十二年十二月・第十二号の「三たび『わが校の応援歌のルーツ』について」である。

それらの要点を簡潔に記す。(1) 応援歌「戦わん哉」の曲の元歌は、旧制第四高等学校(金沢市)の寮歌「南下軍の歌」である。四高出身の故平川民治氏(同窓会名簿に旧職員として記されている)が能中の応援歌として採り入れたと聞いている。(2) 応援歌「北羽に吠ゆる」の曲の元歌は旧制第六高等学校(岡山市)の寮歌「新潮走る」である。(3) 凱歌「天馬空征く」の曲の元歌は、旧制第一高等学校の水泳部の部歌「狭霧はれゆく」である。後述の久喜氏が能中に入学した昭和九年には「天馬」は応援歌であった。(4) 「遠征歌」(潮騒さゆる北海の)の歌詞には四高出身で能中の英語の先生だった二宮龍雄先生が、ご自分が四高時代に作詞した二つの寮歌から一句ずつ入れている。すなわち、四高寮歌「あ、幽冥の」からは「潮騒さゆる北海の(四高の元歌詞は、潮騒さゆる北の海)」を、同じく四高応援団遠征歌「滄冥千里」からは「誰かと、めん若人の嵐に向かう熱血を」をそのまま入れている。(5) 逍遙歌(一時は敗戦歌ともされた)「洛陽寒く黄昏て」は曲も歌詞も四高の「剣道部優勝歌」から拝借したものである。

京都での六連敗後、血と涙の猛稽古で勝ち得た優勝なので、悲壮な優勝歌である。テンポが遅く、重く、暗い。それで本校では逍遙歌や敗戦歌になったものと思う。詳しくは松陵を。

松陵十号で小生は「平成二年三月に同窓会が発行したわが校の『校歌・応援歌集』では、作詞、作曲者の明記は『校歌』と『遠征歌』のみである。ほかの応援歌などは曲の元歌は旧制高校の寮歌ではあるが、能中での歌詞の作詞者がわからない」と記した。楽譜は元教諭(音楽)の中田正則氏(S三十八年卒、三十三期)が、口伝されて歌われているメロディーから採譜したと續隆氏(S二十六年卒、二十一期)より聞いた。

平成十一年十月に能代市柳町在住の久喜健男氏(S十四年卒、第十期)よりお手紙が届いた。それによれば応援歌「戦わん哉」は昭和十三年五月の発表である。故人となられた方も多いので記憶が明確なうちにその経緯を伝えたい。応援活動の開幕が迫っていた。至急応援歌を作ることになり、久喜健男ら十期生有志が苦勞の末作詞した。当時は能中健児という呼び方しかなく、向陵や神陵に匹敵する呼び名がほしくて樽子山なら樽陵かとも考えた。野球部OBが「松陵」を使っているのを知り、早速健児と結びつけて「松陵健児」と造語した。その後「松陵健児」が市民権を

得て通用しているのは感無量である(筆者注)。事実、創立七十周年誌の年表で昭和十二年のところ「この年『能中野球部統制機関』後の『松陵会』が結成された」と記されている。はてさて、歌詞は出来たが曲は何処へ依頼すればよいか五里霧中。早稲田、慶應、一高の「嗚呼玉杯に」からの拝借も考えた。野球部員の一人(故人)が野球部でいい歌を歌っているという。聞けば平川民治監督の母校、第四高等学校の「南下軍の歌」だった。野球部の練習が終わると円陣になって歌っていたという。彼に有志で作詞した歌詞で歌ってもらったら、豪勇にして悲壮で心魂ともに揺さぶられ、衆議一決した。その後、歌がうまい

野球部員(戦死)が土手に立って一節ずつ歌って、土手下の全員が唱和して覚えた。この歌の作詞者を「能中十期生有志」としていただきたい。以上がお手紙の内容である。

小生が、久喜氏と能中同級の北嶋和信氏に聞いてみたところ「久喜は応援活動と応援歌の作詞に熱心だった」と言われた。

平成十二年が明けて一月十五日、久喜氏よりまたお手紙をいただいた。

松陵十一号に「戦わん哉」の作詞の経緯が記録されて、故人となられた十期生有志も泉下で満足していることでしょう。(工藤より)送っていただいた現在の校歌・応援歌集では「戦わん哉」の歌詞は長年口伝、口伝で元の句、

元の漢字が違ってしまっているが、ひどく相違しているわけではなくむしろ良く口伝されている。ただ、「王道は正、霸道は邪」と教えられた小生らは、「霸業」という語は氣に
なる。いづれ作成当時の歌詞をお知らせする。

小生が催促して平成十二年七月五日に、作成当時の歌詞とお手紙が届いた。久喜氏が作詞の主体だったが、南下軍の歌があると教えてくれた野球部の小山君（粕毛村）、歌唱指導の野球部員深井君（能代港町材木町）と共に歌詞を検討した。応援歌期成同盟グループの大原君（後に能高バレー部監督）、山内君（全県陸上短距離チャンピオン）、吉田君（就職希望組でトップの秀才。私と同じ町内の竹馬の友。戦死）らにも目を通してもらった。北嶋和信君にも見てもらった。だから作詞は十期生有志でよい。

以下、久喜氏からの昭和十三年五月作成当時の歌詞と現在の歌詞を比較する。

〈作成当時の歌詞〉太字が現在の歌詞と異なる箇所である。

一、戦わん哉時^に到る／我に敵する何者ぞ／松陵健児征く處／陣鼓山河に高鳴りて／制覇の希望（のぞみ）今ぞ燃え／此處（こ

こ）昂然の意気高し

二、春行き野辺の花霞／消えて松陵緑せば／血は湧き立ちて逆巻きて／燃ゆる意気の火に北の子は／利剣に光を仰ぎしが／遂に試練の時^に到る

三、五年暫の夢追わぬ／益荒猛男（ますらたけお）の今日の栄え／時乾坤に移ろいて／聖者の鐘は今鳴りぬ／健児理想も華やかに／輝く制覇を成さん哉

〈現在の歌詞〉

一、戦わん哉時^に至る／我に敵する何者ぞ／松陵健児ゆくところ／陣鼓山河に高鳴りて／制覇の望^み今ぞ燃え／昂昂然の意気高し

二、春逝き野辺の花がすみ／消えて松陵緑せば／血は湧き立ちて逆巻きて／燃ゆる意気^の北の子は／利剣に光を仰ぎしが／遂に試練の時^に至る

三、三年暫の夢追わぬ／ますらたけおの今日の日に／時乾坤に移ろいて／聖者の鐘は今鳴りぬ／健児理想も華やかに／輝く制覇を成さん哉

今ここで字句の相違の解説をするには限り

がある。久喜氏らは字句、漢字の使い方についても大変気を遣われたようである。以下は久喜氏の解説である。「到る」と「至る」であるが「いよいよ時機到来」の意で「到」を使ったという。「春逝き」は詩的で美文調。応援歌にはふさわしくないので「行き」とした。現在の歌詞の「三年（みつとせ）」は作成時は五年で（筆者注：旧制中学は五年）「とせ」と豪快に発音した。「ますらたけお」は漢字でないと。現在では「丈夫武男」か。「聖者の鐘は今鳴りぬ」はインターハイ（当時はインターミドル）の開会式および試合のプレイボールを表現したつもりである。三番の「輝く制覇を成さん哉」は一番の五句「制覇の希望（のぞみ）今ぞ燃え」に対応する「成就」の意味で「成」を使用した。

久喜氏のお手紙からは、氏は「霸業」ではなく「制覇」だとこだわっている。小生は、久喜氏のお手紙から、劉邦に敗れた項羽を、曾鞏が漢詩「虞美人草」の中で「霸業已に煙燼に隨いて滅ぶ／剛強なるは必ず死し／仁義なるは王たり」と詩っているように、氏は、「霸業」には「力づくでの征服」の語感を感じているのだと思った。

このように、久喜氏は平成十二年（昭和七十五年）の時点で六十二年前の「戦わん哉」の作成当時の歌詞、使用字句や漢字の推敲理由、「戦わん哉」の完成までに関係した方々

を詳細に記憶されている。

「久喜さんが作詞したも同然じゃないですか」と小生がいくら説得しても久喜氏は「有志みんなで作ったので、作詞者は能中十期生有志にして下さい」と遠慮される。

ところが、久喜氏と同級の北嶋和信氏は「あれは久喜が作詞したんだ。おれは一年から五年まで級長だったからよくわかる」と。そこで小生は折衷案として「久喜健男ほか能中十期生有志」としたらどうかと同窓会役員会に諮り、ご本人からも同意を得たしだいである。

以上から、平成十五年九月十九日（金）の金勇での平成十五年度同窓会総会において、応援歌「戦わん哉」の作詞者は、「久喜健男ほか能中十期生有志（昭和十四年卒）」とすることが承認された。

久喜氏と同級の北嶋和信氏は、惜しくも小生がこの稿を書いている途中の平成十六年十二月二十二日に急逝された。この稿をもって謹んでご冥福をお祈り申し上げさせていただく。なお久喜氏は、今後の応援歌集の作成時には、作詞者が記されるからには原歌詞も掲載されるよう強く希望している。

三、応援歌「日本海」の作詞者は「故佐藤二郎氏（昭和十年卒、六期）といわれる」に決定す

平成十一年十月に、応援歌「戦わん哉」の作詞の経緯について久喜氏よりお手紙をいただいた時のことである。お手紙の内容に以下のことも書かれていた。

「日本海の荒波の／燃ゆる血潮のしぶき浴び」が昭和九年の秋か十年の春に新作の凱歌として発表された。現在の凱歌「天馬空征く雄たけびに」は昭和九年に久喜氏が入学した時には応援歌として教えられていた。この「日本海」は今でも歌われておりますか？と。小生は「現在は応援歌「日本海」として歌われております」とお返事した。なるほど、歌詞の内容は凱歌にふさわしい。

久喜氏によれば、この「日本海」の作詞者はS十年卒、六期の故佐藤二郎氏であるという。佐藤氏は競技部のスター選手だった。氏の臆気な記憶では佐藤氏は農大に進学されたはずという。作曲は音楽の先生だった。久喜氏は佐藤二郎先輩が作詞するのを見て、生徒でも作詞していいのだなと思って自分らも「戦わん哉」を作詞したのだとおっしゃる。

平成二年の応援歌集によれば「日本海」の歌詞は、皆さんご存じのようにつぎのごとくである。

日本海の荒波の／燃ゆる血潮のしぶき浴び
／雄図目ざして今立てり／健児征馬のゆくところ
／敵城潰えて影もなし／勝利 勝利／誉れは高し我らが選手

平成十五年一月二十五日、小生は久喜氏宅を訪ねた。氏によれば、元の歌詞では——線部は「雄図を目指して今起てる」で、——線部は「ほこれ高く」だったという。

さらに氏の記憶によれば、「日本海」の二番はあまり歌われなかったが、歌詞は以下のごとくであったという。

松の緑は日に映えて／川の流れは喜にむせぶ／陣頭高く叫ぶ時／（思い出せない）／敵城潰えて影もなし／勝利 勝利／ほこれ高く我らが選手

同窓会総会に備えて、平成十五年九月七日に能代市落合の六期の山内鉦次郎氏に電話してみた。「私は排球部だったが、佐藤二郎さんは顔も思い出せない」とのお返事だった。

同年九月十九日の同窓会総会で、戦後の校章のデザイン考案者と応援歌「戦わん哉」の作詞者は承認されたが、応援歌「日本海」の作詞者は総会の資料には「調査中」と記しておいた。その席で、小生の同級の加賀勝己氏（S三十五年卒、三十期）が「秋田市在住の碓谷欽一郎氏（S十二年卒、八期）に問い合わせてみたかどうか」と助言あり。加賀氏に、碓谷氏に問い合わせせてもらったが「記憶にな

い。同期八期の、福島市在住の柳谷健六君なら何か記憶があるのではないか」とのこと。

平成十五年十月十三日に小生が柳谷氏に手紙でお問い合わせした。十月十五日「私は野球部、陸上部、柔道部で応援歌は専ら歌われる方だった。六期の佐藤二郎様は顔も思い出せません。六期で今も文通している先輩に釧路市在住の平賀孝一様がおりますので問い合わせてみて下さい。」との返信葉書あり。

同年十一月二日、平賀氏へ手紙で問い合わせる。十一月五日「(日本海は)まったく記憶にない。佐藤二郎さんも思い出せない。」との電話あり。

久喜氏も方々調べたが、証人は見つからなかった。電話口で「日本海」を歌った方もおられたが、その由来は知らなかったと。何せ六十九年前のことである。六期生も八十六歳くらいである。名簿では六期生は六十三名である。久喜氏は「運動部は応援歌を歌われる方だから、だれの作詞かなど関心がなかったのかな」とぼやかされた。

「日本海」をどのように扱ったらよいのかの考え方として、①久喜氏のおっしゃるように佐藤氏の作詞とする。しかし難点は、佐藤氏と同期の方々や、佐藤氏のすぐ近くの後輩の方々の記憶がほとんど全く無い。久喜氏には大変失礼ではあるが、氏以外に佐藤氏だと言う方がいない。②佐藤氏の作詞としない。

の二つの選択肢が考えられた。

以上のような経緯から、平成十六年八月十日(火)の校長室での同窓会役員会で「後で資料が出て来たりすることもあり得る。総会に諮っても、諮られた同窓会員が①②のどちらにも決めようがないではないか」との田中仁純会長(S三十年卒、二十五期)や續隆副会長(S二十六年卒、二十一期)らの意見でつぎのように決まった。

平成十六年八月十日の同窓会役員会にて、応援歌「日本海」の作詞者は「故佐藤二郎氏(昭和十年卒、六期)」といわれる」とすることに決定した。

おわりに

この稿には、当然のことながら故人を含めたくさんの同窓生や本校関係者が関わっている。記録に残ることゆえ、勘違いなどの誤りを避けるために、久喜健男、小西重夫、續隆、柴田郁、田中仁純、松谷健の六氏に原稿に目を通していただきご教示を受けた。六氏はもちろん、創立八十周年事業記念誌担当の太田研氏(S五十五年卒、五十期)らこの稿に関わった多くの方々に謝意を表す。

もう十年早かったならとの思いが強いが、「今より遅いよりは良いだろう」と己を慰め

ざるを得ない。大変大袈裟な言い方だが、過去の事柄を調べる学問などをおやりになっている方々は大変な苦勞をするものだろうなどと、素朴な感想を抱きながらこの稿を書いた。

一方、ほかの応援歌でも、たとえメロディは拝借でも歌詞を作詞した方がいたわけであるが全く記録されていない。よく言えば、遠慮深くおおらか。悪く言えば、時代のせいもあつたとは思いますがオリジナリティなものに対して無頓着だったのだろうとも思った。

ともあれ、唐の漢詩にあるごとく、まさに「年々歳々花相似たり/歳々年々人同じからず」ではあるが、創立八十周年を祝し「我が校の伝統よ永遠なれ」と祈ってこの稿を了えることとする。